

当院における悪性疾患に対する精子凍結保存：他病院との連携について

今中 聖悟¹, 貫井 季沙¹, 江原 千晶¹, 道端 肇¹, 峯川 亮子¹, 藤岡 聡子¹, 井田 守¹,
福田 愛作¹, 森本義晴²

IVF 大阪クリニック¹ HORAC グランフロント大阪クリニック²

【目的】集学的治療によりがん患者の治療後生存率は飛躍的に向上し、治療後の QOL(生活の質)が新たな課題となっている。当院は生殖医療専門施設であるが、近隣には生殖医療部門を持たない総合病院が多数存在する。当院では妊孕性温存治療を行うとともに、2017 年 1 月より近隣病院で妊孕性温存についての講演会を開催し、情報提供を積極的に行っている。今回、当院での悪性疾患に対する精子凍結保存の現状と問題点について検討した。

【方法】2006 年 1 月から 2018 年 7 月末の間に、他院より妊孕性温存を目的として紹介受診した 76 名の男性患者を対象とした。

【結果】平均年齢は 27 歳であり(13 - 60 歳)、疾患内訳は精巣腫瘍 31.6%(24 症例)、骨軟部腫瘍 31.6%(24 症例)、血液疾患(白血病、悪性リンパ腫等)18.4%(14 症例)、その他の腫瘍(大腸癌、肺癌、肝臓癌、前立腺癌、膀胱癌など) 18.4%(14 症例)であった。原疾患に対して既に何らかの治療を受けた後に紹介となった患者は 28 名(36.8%)であった。2017 年 1 月からの講演会開始以前と以降では、がん治療後紹介となった患者はそれぞれ 37.5%(21/56 名)と 35.0%(7/20 名)と大きな差はなかった。精子凍結ができなかった患者は 4 名あり、その原因は Azoospermia が 2 名(化学療法後 1 名、治療前ではあるが原疾患が精巣腫瘍 1 名)、体調不良で採精困難が 1 名、マスターベーション未経験が 1 名であった。精子凍結後 ART 治療に使用した症例は 5 例(凍結精子使用率 6.9%)であった。2018 年 7 月時点で 4 組が生児を得ている。2 組は ART 妊娠であり、2 組が自然妊娠であった。

【結論】当院が情報提供を積極的に行って以降紹介患者数は増加したが、依然としてがん治療開始後の紹介が多い。今後がんと生殖に関する情報が医療関係者のみならず社会に浸透すること、そしてがん治療病院と生殖施設の緊密な連携が、効果的な妊孕性温存に必要な不可欠であると考えられた。